

# 小学校教員養成課程における体験的学習の実践と意義

## －社会科歴史的内容を中心として－

### Practice and Significance of Experience Learning in a Primary School Teacher Training Course

菊 地 達 夫  
Tatuo KIKUCHI

#### I. はじめに

現行の小学校学習指導要領社会では、体験的学習に類似する言葉として「体験的な活動」がある。体験的な活動は、従前より取り組んできており、新しい学習形態として登場したのではない。体験的な活動の表記は、その重要性が高まり、積極的に導入することが求められたものである。新学習指導要領（2008年告示）でも、指導計画の作成と内容の取扱いにおいて、「各学校においては、地域の実態を生かし、児童が興味・関心をもって学習に取り組めるようにするとともに、観察・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図るようにする」という中で触れている。現行学習指導要領でも、ほぼ同様の記述の中で触れているが、2004年の一部改訂時で主体的な学習を推進する手段として、体験的な活動の重要性が確認されている。

体験的学習（体験的な活動）の定義は、日本社会科教育学会編（2000）によれば、「なすことによって学ぶ」とあり、体で学び体得できることと示されている。体験的学習は、他に「体験学習」、「体験的な学習」、「体験的な活動」との表現はあるが、ほぼ同じ意味で使われている。また、体験的学習は、4つに分類できる。それらは、直接体験、模擬体験、疑似体験、間接体験の順で重要とされている。

体験的学習の必要性は、生活体験や自然体験の不足、社会体験の不足を背景としている。いずれも日常生活あるいはその延長線上にあるものであり、公民的内容や地理的内容に関するものが多い。一方、歴史的内容の体験的学習と言えば、見学活動が中心になってしまう。そのため、歴史的内容は、教室での授業が中心となり、体験的学習の取り組みもしにくい。同時に、歴史的内容は、主として第6学年で実施しており、体験的学習を中学年までの学習活動とするきらいもある。

他方、一部の博物館では、昔の生活・文化を体験できるようなプログラムを積極的に立案している。これには、小学校低学年以下のこどもに、博物館の活用をすすめるねらいもある。ただ、その一部には、歴史的内容を理解する上で、十分活用できるものもある。そのため、小学校教員には、発達段階や教科内容にあった体験的学習の指導技術を知る必要性がある。

本稿では、このような問題意識に立ち、小学校教員養成課程において体験的学習を取り入れ、実施過程を検討しながら、その意義を明らかにしたい。まず、体験的学習について、接続教科・機関の取り扱いを整理し、どのような接続ができるのか、検討する。続いて、体験的学習の実践について、事前準備（指導）、実施内容、事後指導の順で述べる。その後、実践状況と事後に実施したアンケート調査及びまとめの記述内容をふまえ、体験的学習の意義について検討する。

今回の体験的学習は、歴史的内容での実践を事例とする。具体的には、新学習指導要領において復活する「狩猟・採集」の時代すなわち「縄文時代」の単元内容を想定した。現行学習指導要領からの移行期間では、一定の教材研究を必要とする部分である。よって、今後の現場教員を目指す学生には、適切な単元と考えた。なお、対象学生は、学士課程2年生であるが、3年生、4年生、科目等履修生も含まれる。体験的学習の実施は、北海道立埋蔵文化財センター専門職員（博物館学芸員）の協力による（2008年12月実施）。

## Ⅱ. 歴史的内容における体験的学習の接続

### (1) 幼稚園教育・小学校生活科との接続

幼稚園教育の領域環境のねらいでは、「身近な環境に親しみ、自然と触れあう中で様々な事象に興味や関心をもつ」とある（2008年幼稚園教育要領告示）。この中では、自然的事象や社会的事象に対して、五感を通じて積極的に接することを目指す。すなわち、見る、聞く、においを嗅ぐ、触る、味わうといった体験活動を行う。その結果、事象に対して興味関心を誘発できる。幼稚園教育における体験的学習のねらいは、その活動を通じて、いかに興味関心を引き出すか、重要としている。

歴史的内容との接続を考えた場合、昔から伝わる遊び体験を活かすことができる。2006年の改正教育基本法では、「伝統と文化を尊重」が明記され、新学習指導要領において、それに関わる学習活動が重視された。中でも、社会科の歴史的内容や地理的内容は、もっとも関係が深い。

幼稚園教育では、年中行事において、昔から伝わる遊び体験を取り入れることができる。例えば、正月の場合、カルタ遊び、福笑い、すごろく、コマ遊び、凧揚げなどの遊びがある。デジタルゲームに慣れたこどもには、見慣れない遊び道具を通じて、興味関心を誘発しやすい。また、保護者世代、祖父母世代の遊びが多く、大人を交えた体験的学習に発展させることもできる。例えば、上手にできないこどもが、保護者や祖父母の手本をみて、刺激を受け、意欲的な行動に変えることもできるだろう。また、良きアドバイスを受けることで、上手に遊べるようになり、楽しい遊びであることを理解できるかもしれない。

小学校生活科では、教科目標として以下のようにある（2008年小学校学習指導要領告示）。具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心をもち、自

分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養うとある。具体的な活動や体験とは、直接的な活動を指しており、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊びなどを例示している。また、活動や体験を通じて、感じることを、考えること、気付くことに結びつくようにする。さらに、言葉、絵、動作、劇化などで表現するような活動も取り入れる。

一方、これまでの生活科の実践は、体験的学習のみで終わり、気付きなどを質的に高めるような学習に乏しいと指摘されてきた。そのため、新学習指導要領では、この点の改善として、「発見する」や「比べる」といった多様な学習活動になるような工夫を強調している。

接続機関・教科	体験的学習の内容（例）	体験的学習のねらい
幼稚園教育	昔の遊び体験（年中行事）	活動・事象への興味・関心
	↓	
小学校生活科	昔の遊び体験（伝統・地域行事）	活動・事象への知的な気付き
	↓	
小学校社会科 （歴史的内容）	昔の道具の活用・比較	基礎的な歴史認識 （歴史的内容）
	↓	
中学校社会科 （歴史的分野）	昔の道具の活用・比較 （郷土・身近な地域）	応用的な歴史認識 （歴史的分野）

第1図 体験的学習（歴史的内容）における接続機関・教科の関係（概念図）

歴史的内容との接続を考えた場合、「発見する」や「比べる」は、歴史的内容の体験的学習においても重視されるべきものである。例えば、年代の違う遺物を比べ、類似点や相違点を発見させる。この場合、視聴覚的な比較の他に、触る、嗅ぐといったいくつかの体験的学習も想定できる。

## (2) 中学校社会科との接続

中学校社会科は、第1学年と第2学年でπ型展開において、地理的分野と歴史的分野を学ぶ。よって、小学校の歴史的内容を終えた児童は、学習期間が空くことなく、歴史学習に入ることができる。

中学校社会科歴史的分野の目標をみると、「身近な地域の歴史や具体的な事象の学習を通して歴史に対する興味・関心を高め、様々な資料を活用して歴史的事象を多面的・多角的に考察

し公正に判断するとともに適切に表現する能力と態度を育てる」の中に体験的学習が含まれる（2008年中学校学習指導要領告示）。具体的には、歴史的事象を多面的・多角的に考察する過程において、体験的学習の成果を活かすことができる。

中学校社会科全体をみると、指導計画の作成と内容の取り扱いにおいて、体験的学習は、平素から親しみ適切に活用するよう示している。すなわち、自らの直接的な活動を通して社会的事象をとらえ、認識を深めていくことを期待している。

歴史的内容との接続を考えた場合、小学校では、一つの歴史的事象を理解する手段として、体験的学習を取り入れることが多かった。中学校では、地域の歴史的事象を理解するため、いくつかの資料を用いる。その資料を理解する手段として、体験的学習の成果を活かすことができる。

体験的学習の接続は、基礎的な歴史認識（小学校）から応用的な歴史認識（中学校）に導く役割をもつ。

### Ⅲ．体験的学習の実施過程

#### (1) 事前準備

今回の体験的学習は、触覚的な活動を中心としたものである。体験的学習は、五感のうち、視聴覚以外の身体活動を含む点に意義がある。例えば、昔の道具を使用する場合、見た目には簡単そうだが、実際に取り組むと難しい、使うことで作り手の工夫がわかったなど、視聴覚以外の感覚機能を使うことで新たな理解を得ることができる。

社会科歴史的内容（高学年）では、体験的学習を通じて単元内容の理解（歴史認識）に結びつくことを期待する。今回の実践では、縄文時代の道具やその活用から、歴史認識に結びつくよう目指した。今回のように、学外（校外）の博物館学芸員に協力してもらう場合、どのようなことを目的とし、体験的学習を取り入れようとしているのか、しっかり理解してもらう必要がある。具体的には、(1)道具を比較して、その変化を理解できること、(2)身近な自然物を上手に加工し利用していたことなどの歴史認識を、体験的学習から学べるようにした。(1)では、同時代の道具の形態が、出来る限り類似するものを集め、容易に比較できるように工夫した。(2)では、間接体験の前に、昔はどのようなもので代用していたか発問し、それについて思考させた。当初、上記のような体験的学習の目的が、しっかりと伝わらず、より適切な教材の準備と展開方法の修正をお願いした。先方には、確かに手間をかけたが、講義展開と連動しない体験的学習を行えば、筆者（小学校教員）、博物館学芸員、学生に不利益を与える。とりわけ、教員養成課程の中で取り組む場合、より責任が重い。また、体験的学習の目的や展開方法の他に、どのようなことを既習しているのか、学習成果をどのようにまとめようとしているのか、事前に示しておく必要がある。加えて、教員養成課程では、対象学年、取得希望の教員免許状（博物館学芸員や社会教育主事資格）、卒業後の主な進路などの情報提供も重要である。そのよう

な情報を示すことで、体験的学習では、より適切な資料の活用、発問を準備することができ、高度な成果につなげることができる。

## (2) 実施内容

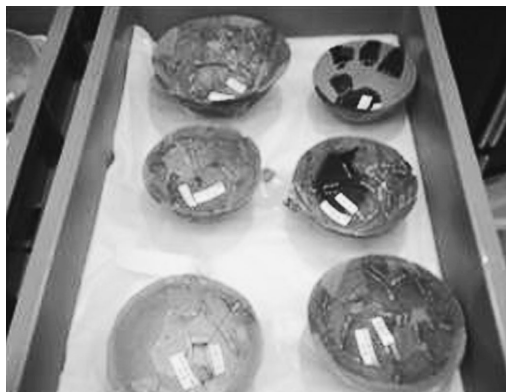
体験的学習は、土器を触っての比較（活動1）と滑石を活用してのアクセサリ作り（活動2）、加えて、埋蔵文化財はどのように出土したのか（ビデオ視聴）、現場（小学校）での活用事例を資料で示した。作業時間は、ビデオ視聴と資料説明が25分間、活動1が15分間、活動2が50分間で、全体90分間になるように組んだ。なお、履修者数が多いため、2つのグループに分け行った。

ビデオ視聴は、約12分間のもので、縄文期の生活（イラスト画像）、埋蔵文化財の発掘過程、埋蔵文化財の現代的な役割について、平易にまとめたものである。今回の資料は、埋蔵文化財（レプリカを含む）を活用しており、発掘過程や役割を知ること、体験的学習の意義を深めた。

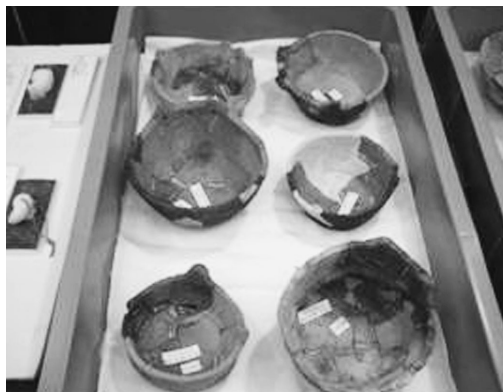
配布資料は、こども考古学教室、出前講座（小学校ほか）、教員研修について、実施概要や活動の様子（写真）を取り上げたものである。学生には、こどもがどのような機会では体験的学習を行っているのか、理解することに役立った。その結果、小学校と博物館の連携のほかに、自主的な体験的学習に参加を促すこともできる。また、現場教員の指導技術を高める機会があることも周知できた。

活動1では、形状の似た土器を集め、縄文土器と擦文土器を手にとって触りながら、比較しどのような特徴があり、道具の変化や加工技術があったのか、気付かせるようにした。具体的には、3人1組で1つの土器（縄文土器）を5分間観察し、わかったこと、気付いたことを発表させた。続いて、擦文土器も、同様に観察し、比較を通じての意見を求めた。普段、発表に消極的な学生も、しっかり観察し、意見を述べていた。

活動2では、作業前に、磨くもの、穴をあけるものとして、どのような自然物を使っていたか、発問した。その結果、磨くものとして、砥石を使っていたこと、穴をあけるものとして、



活動1の教材（縄文土器）



活動1の教材（擦文土器）



体験的学習の様子（活動1）



体験的学習の様子（活動2）

第1表 活動1の発表意見

前半（縄文土器）	後半（縄文土器）
<input type="radio"/> 底がまるい	<input type="radio"/> ガタガタしている
<input type="radio"/> 突起がある	<input type="radio"/> 他の時期のものより軽い
<input type="radio"/> 厚さがある	<input type="radio"/> 周りに模様がある
<input type="radio"/> 縄の模様がある	<input type="radio"/> 口のちかくに穴がある
<input type="radio"/> 穴がある	<input type="radio"/> 底がまるい
<input type="radio"/> 底の近くに点々がある	<input type="radio"/> 持ちやすい
<input type="radio"/> 底が焦げている	<input type="radio"/> 大きい
	<input type="radio"/> でこぼこしている
前半（擦文土器）	後半（擦文土器）
<input type="radio"/> 底が平ら	<input type="radio"/> 軽い
<input type="radio"/> 厚さがない（薄い）	<input type="radio"/> 底が違う（置きやすい）
<input type="radio"/> 焦げている	<input type="radio"/> 穴があいている
<input type="radio"/> 持ちやすい	<input type="radio"/> 現在の茶碗に似ている
<input type="radio"/> 底に出っ張りがある	<input type="radio"/> 模様があった
<input type="radio"/> 現在のものに似ている	<input type="radio"/> 薄い
<input type="radio"/> 割れているものがつながつている	<input type="radio"/> ふちがまっすぐ

資料) 聞き取り記録

ヒスイ（石）を使っていたことを思考させた上で解説をした。また、ヒスイは、日本の中で限られた地域（糸魚川付近）でしか産出されておらず、当時、すでに交易が盛んであったことにも気付かせた。さらに、紙やすりを使って磨けば、1時間以内である程度の形に仕上げることができる。一方、石を使えば、相当な時間を必要とし、大変であろうことを想像することはできる。このような発問・思考がないまま作業に入ると、単なる滑石を用いたアクセサリー作りの体験で終わり、意図する歴史認識にはつながらない。

多くの学生は、楽しみながら活動できた。一部の学生は、終了時間を過ぎても居残り、作業に没頭する姿もあった。体験的学習は、楽しみながら歴史認識を深めることができる点も大きな魅力である。

### (3) 事後指導

事後指導は、約1週間後の平常講義日に実施した。まず、体験的学習（ビデオ視聴・活動1及び2）でわかったこと（気付いたこと）、思ったことを文章で書かせた。その後、体験的学習の評価について、5段階のアンケート調査を行った、なお、調査結果は、次章で詳しく検討する。学生のまとめとアンケート調査は、まとめの前に行うことで記述内容や回答を誘導することを防げる。先にまとめをすれば、模範的な回答ばかりとなり、記述内容の幅を狭める。

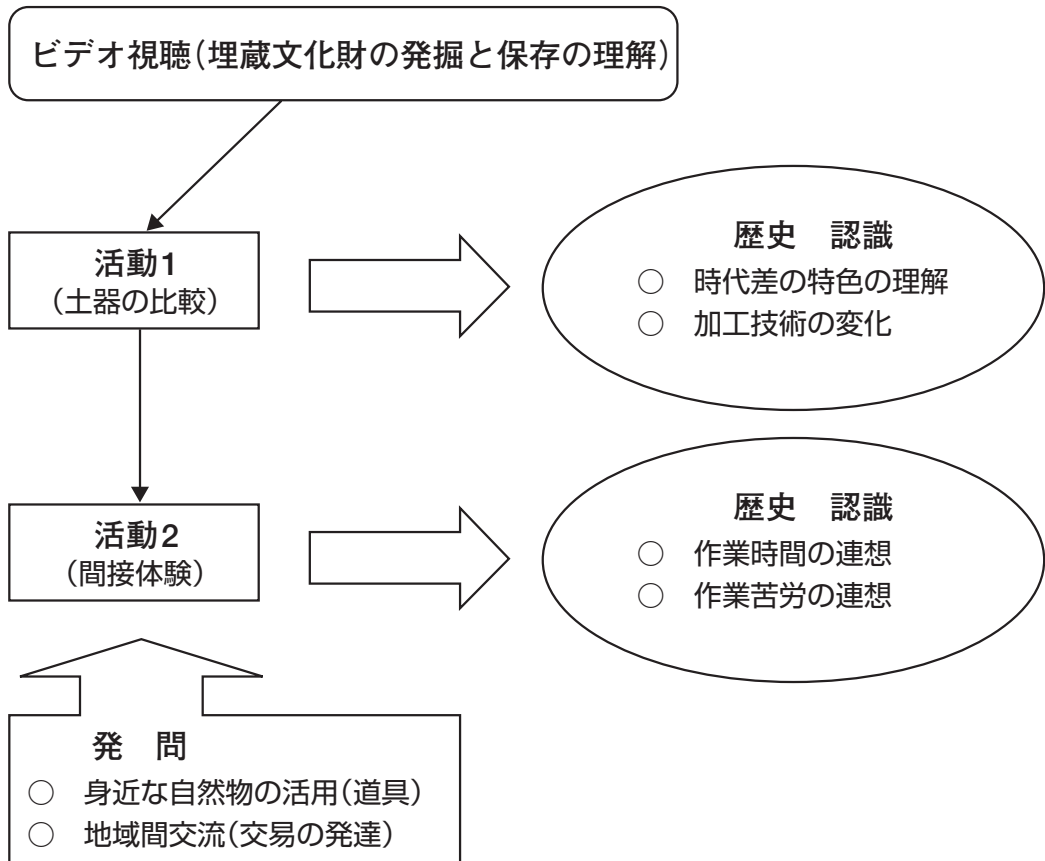
続いて、体験的学習のねらいについて確認した。活動1では、時代差のある土器に触れながら比較することで、単なる双方の特色を理解するだけでなく、どのように変化したのか、気付かせた。活動2では、間接体験の前に、本来の道具の活用について考えさせた。この思考から、当時の体験を連想（作業時間や苦勞）できること、その時代における道具の活用のあり方を理解することに触れた。後者では、身近な自然物を活用していたこと、身近にない場合、交易で得ていたことに気付かせた。これらの気づきに導くことが、体験的学習の成果を高める。

以上、事後指導では、体験的学習の過程を振り返ることで、ねらいを確認させた。学生には、「楽しい」や「おもしろい」といった印象を与えることも大事であるが、体験的学習からどのような歴史認識を得ようとしたのか、しっかり理解してもらうことが重要である。こうした理解ができて、現場における体験的学習の効果的な実践を期待できる。

## IV. 体験的学習の成果と評価

### (1) 学生の体験的学習の理解

本節では、事後指導時に書かせた体験的学習のまとめの中で、特筆できる内容を取り上げ、検討する。まとめの記入は、約20分間で行った。



第2図 体験的学習と歴史認識の関係（概念図）

第2表 体験的学習のまとめの一部（原文，一部省略）

ビデオ視聴

- 1 このようなビデオを事前に見ることにより，授業の見通しや目標をはっきりするのではないかと思う。
- 2 千歳のほうで遺跡があるのか知らなかった。
- 3 今まで博物館などに展示されている作品は，どこから発掘しているのか常に疑問に思っていました，ビデオを鑑賞し，それぞれに遺跡発掘場所があり，そこから見つけ出し，展示していることがわかりました。

活動1

- 1 2つの土器について模様や作り方の違いや時代の違いがわかった。
- 2 目で見ただけではなく，触れてみることにより，「ごつごつしている」「ざらざらしてい



- る」「軽い」など気付いた。きっと触れてみなければわからなかったと思う。また、みんなで気付いたことを発表しあうことによって一人一人の知恵が増えると思った。
- 3 昔の物を見て、気付くことは人それぞれですが、その気づきで、昔の人の暮らし方、文化がわかり、自分たちの先祖をわかり、本当に貴重な物なのだと改めて思いました。それに触れたことは、本当に貴重な体験でした。
  - 4 時間があれば、土器以外も触れてみたかった。
  - 5 本州とは違う歴史を歩んできた北海道であるが、関連があることを知った。
  - 6 茶碗と鍋みたいなのは、昔からあって、その応用なのだ気付くことができた。
  - 7 作られた時期によって、同じような形の土器でも、細かいところが違っていて、デザインと作る上での耐熱性とか考えられていて、すごいと思った。
  - 8 実際に発掘された土器に触れるという体験はあまりできないことなのでとても貴重な体験ができたと思う。また一人一人が気付いた点を発表し合い、互いに理解を深めていける活動は子どもにとってわかりやすく学びやすい活動になると思った。
  - 9 たまたま破損することはなかったが、児童に触れさせる場合、勇気がいりそうなことである。

## 活動2

- 1 勾玉の穴をあけるのに昔の人たちは、石を使ってあけていた事がすごいと思った。作るのは、とてもおもしろかった。
- 2 直接肌で感じ、当時使用されたものを作製するという作業は、この授業の意義や昔のことについて考えたり興味を持つきっかけとなると思う。
- 3 実際につくってみることで、「勾玉って何だろう」「何のためにつくったんだろう」という疑問が生まれた。疑問が生まれることによって自分で考え学ぼうとする気持ちが生まれると思った。
- 4 昔の人は、これを石でやっていたのだと思うと、本当に大変なことだと思いました。
- 5 当時の人々は、どのような思いで作ったか気になった。勾玉は、みんなで作っていたのか、勾玉は宗教性を強く感じられるものだった。時間がなく、くわしい説明がなかったのもっと知りたかった。
- 6 ひも通しの穴をつくる作業は、今は様々な道具があってやり方はあるが、昔の人たちは知恵と工夫で一つ一つの暮らしぶりを今に伝えていると思う。
- 7 自分は最後まで残って作ったおかげで、とても納得できる勾玉を作ることができた。
- 8 ヒスイというとても硬い石を一体どうやって昔の人は穴をあけていたのかという点で、竹を使って穴をあけていたと聞いてとても驚いた。

ビデオ視聴は、埋蔵文化財の出土過程を知ることによって、体験的学習の教材理解につながった。とりわけ、博物館資料をみる場合、すでに展示された状態にあるため、その過程を知るとは、なかなかできない。今回の体験的学習の教材は、土器と装飾品であった。大昔の土器や装飾品が、どのような形で眠っていたのか、非常に興味深い。「大昔のものです」と言って、差し出されても、なかなか実感が湧かない。数十年前のものでも、維持（保存）するのは難しいのに、本当に大昔のものか、疑問をもって不思議ではない。そのため、埋蔵文化財の発掘・保存について体験的学習の前に知り得たことが役立った。

活動1では、体験的学習の効果、歴史認識、学習の発展、加工技術の工夫、情報共有の有効性、児童への活用の危惧などがまとめとして示された。体験的学習の効果では、「触る」という活動が、より深い理解につながることを語っている（まとめ2・3）。歴史認識では、時代差による土器の違い、先人の知恵や工夫、交易の発達を知ることにつながった（まとめ1・3・4）。学習の発展では、今回の体験的学習がきっかけとなり、学習意欲を高めた（まとめ2・4）。加工技術の工夫は、体験的学習を通じて理解を深めることにつながった（まとめ6・7）。情報の共有は、意見を述べ合うことが、知らないこと、気付かないことを補完することに役立った（まとめ2・8）。一方、埋蔵文化財が貴重であることが、こどもたちへの活用を消極的にするのではという意見も示された（まとめ9）。これは、マイナス評価にみえるものの、今回の体験的学習が、現場教育への実践を想定させたことが読み取れる。

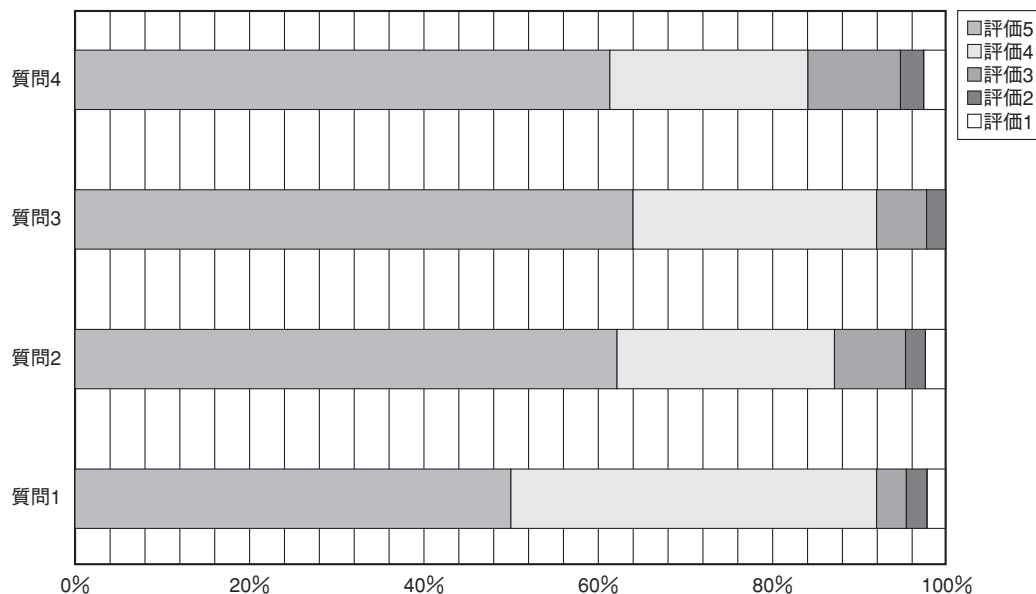
活動2では、間接体験が直接活動を連想させたこと、学習意欲の向上、加工技術の工夫の理解などがまとめとして示された。間接体験では、本来の活動の大変さを連想させることに役立った（まとめ1・4）。学習意欲の向上では、次の学習機会へのつながりや作業の集中力を高めた（まとめ2・3・5・7）。加工技術の工夫では、道具の組み合わせや現代の道具との比較・思考を通じて、気付きを与えた（まとめ6・8）。いずれのまとめも、体験をすることで得られたものである。

以上、まとめの内容をみる限り、体験的学習のねらいがしっかりと伝わったものと確認できる。

## (2) 学生の体験的学習の評価

アンケート調査では、時代差を理解する上での有効性、知恵や工夫の理解、歴史的内容における有効性、活動の楽しさについて尋ねた。いずれも5段階で選択させたものである。

質問1では、評価5がもっとも多く、平均値4.33を得た。体験的学習のねらいの一つであったが、高い評価となった。質問2では、評価5がもっとも多く、平均値4.41を得た。これも、体験的学習のねらいの一つであったが、高い評価となった。質問3では、評価5がもっとも多く、平均値4.53を得た。学生は、小学校歴史的内容の歴史認識に役立つことを認めた。質問4では、評価5がもっとも多く、平均値4.38を得た。学生は、体験的学習の有効性を評価したのみではなく、楽しい活動であったことも示唆した。事実、幾人かは、体験的学習前の意思とは



第3図 アンケート調査の回答結果

資料) アンケート調査

注) 質問1：活動1を通じて、時代差を理解する上で、役立ちましたか

質問2：活動2を通じて、昔の人々の物づくりの知恵や工夫を感じることはできましたか

質問3：今回の体験的学習は、小学校社会の歴史学習に役立つと思いますか

質問4：今回の体験的学習は、「楽しい」活動になりましたか

各質問は、5段階評価の中で1つに○をつけたもの

高評価 ← 

5	4	3	2	1
---	---	---	---	---

 → 低評価

変わり、活動中に「楽しい」や「おもしろい」といった感想を聞くことができた。

高い評価を得た要因は、すでに述べたように筆者と博物館学芸員の密接な打ち合わせにあったと考えている。体験的学習は、博物館学芸員の協力を求めるにしても、大変手間のかかるものである。時間的な制約がある中で学習成果を高めるためには、しっかりした事前準備（指導）と事後指導を行うこと、協力者との連携を行うことが不可欠となる。

## V おわりに

本稿では、小学校教員養成課程において体験的学習を実践し、その意義を検討してきた。具体的には、社会科歴史的内容の中で取り組み、体験的学習を通じて歴史認識につながることを目指した。

まず、今回の体験的学習が、幼稚園教育、小学校生活科、中学校社会科歴史的分野を通じて、どのような接続ができるかを整理した。体験的学習は、五感を活用する点で共通し、どのような目的をもつかで学校段階などの区別ができる。幼稚園教育では、体験的学習を通じて、事象への興味関心をいかに引き出すかを重要とする。年中行事では、昔の遊び体験を取り入れることができ、歴史への興味関心を向けさせることができる。小学校生活科では、体験的学習を通じて、事象への質的な気付きにつながることを重要とする。新学習指導要領では、「発見する」や「比べる」が新たに体験的学習の視点として示された。「発見する」や「比べる」という視点は、体験的学習を通じて歴史認識を得ようとする時も重視される。小学校生活科における「発見する」や「比べる」という体験的学習の経験は、社会科歴史的内容の中で応用できる。中学校社会科歴史的分野では、身近な地域の歴史について、理解を深める一手段として、体験的学習の成果を活かすことができる。すなわち、体験的学習の成果は、一つの歴史認識を得るためではなく、複合的な歴史的事象を理解する上で役立つ。このように、体験的学習の経験やつながりを意識することで、その効果をさらに高めることができる。

体験的学習は、(1)土器を比較しての時代差による違いと変化、(2)身近な自然物の加工技術などについて、歴史認識を目指したものであった。事前準備では、博物館学芸員の協力のもと、教材の選定と展開方法を模索し、有力な資料の配布、適性ある発問につながった。これは、筆者のねらいを博物館学芸員（協力者）が理解したものであり、細かな指示をしたわけではない。その結果、学生の評価は、まとめの記述内容とアンケート調査の双方で高いものを得た。とりわけ、まとめの記述内容では、筆者のねらいを学生も正しく受け止めた。

小学校教員の場合、専科教諭（社会科）がいつも担当できるとは限らない。とりわけ、体験的学習のような準備は、どうしても博物館学芸員といった外部協力者を必要とすることが多い。すでに述べたように、重要なことは、体験的学習を依頼するにあたり、どのような歴史認識を得ようとしているのか、理解してもらうことである。博物館学芸員と言えども、そのねらいを伝えなければ、「楽しい」「おもしろく」活動することはできても、目指す歴史認識につながることは難しい。むしろ、体験的学習の印象が良いことによって、本来の目的が形骸化しやすい。また、教員も博物館学芸員も、そのことに気付けない。このような体験的学習の繰り返しは、活動に対して興味関心を刺激するに過ぎない。

そのため、小学校教員養成課程における体験的学習の実践が大切となる。平常の講義同様に、導入（事前）、展開（体験）、まとめ（事後）の一連のつながりが大切となる。しかしながら、体験的学習、博物館授業、地域巡検といった教室を離れる講義では、事前後の指導の重要性を見失いがちとなる。従来大学の講義（小学校教員養成課程）では、この点に課題があったものとする。体験的学習のねらいが理解できなければ、大学で繰り返し実践しても、現場教育につながらない。また、現場教員になれば、改善できる機会が遠退く。しかしながら、教員免許状更新講習が、2009年4月以降、大学他で実施される。この講習は、本人の意思とは関係なく、一定の年数（10年間）を区切りとして、受講しなければならない。講習の制度化によって、

現場教員に対しても、体験的学習について正しい理解ができる機会が生じた。

他方、2009年4月より、新学習指導要領（小・中学校）の移行期間に入る。社会科歴史的内容では、世界文化遺産の活用、「狩猟・採集」の復活、室町文化と江戸文化の独立が大きな改善となっている。そのうち、内容として増えたものは、「狩猟・採集」である。ただ、旧学習指導要領（1989年告示）では、取り扱っていた内容であり、指導内容として参考になるものを確認できる。一方、小学校社会科は、移行期間において国語科や算数科などのように授業時数の増加がされない。すなわち、授業時数は変わらない中で、部分的ではあるが増加分を含める必要がある。移行期間に限ることではあるが、効率的な展開が求められる。そこで、今回の実践は役立つ。活動1では、他の時代の土器と比較する試みを行った。1つの体験的学習によって、縄文時代と平安時代の内容にまたがる。そのため、双方の時代背景に広げることができる。体験的学習は、効率的な展開にも一定の役割を期待できる。

今後の課題は、体験的学習を経験した学生が、卒業後、現場教員となって習得した知識や技能を本当に役立っているか、検討する必要がある。こうした検討には、長期間を要するが、その実証ができて、本稿の結論が生きてくる。また、弥生時代以降でも、体験的学習を実践し、歴史的内容の中で蓄積していくことも大切となろう。体験的学習が、特定の時代や歴史的資料のみの取り組みとなれば、意義は減退しかねない。

## 付 記

本稿作成にあたり、北海道立埋蔵文化財センターの専門職員には体験的学習の準備や実践、博物館資料の撮影許可など多大な協力を得た。また、社会科指導法Ⅰ（2008年度）の受講者には、調査資料としての協力を得た。記して感謝申し上げる。

## 文 献

- 奥井智久・芦田宏編（2008）：『領域環境 新子どもと環境』三晃書房。
- 北俊夫・寺田登編（1999）：『新小学校教育課程講座社会』ぎょうせい。
- 菊地達夫（2008）：社会科教育における博物館活用の実践と意義－小学校教員養成課程の取組を中心として－、生涯学習研究と実践第11号，pp.191-200。
- 洪澤文隆（1995）：『新学力観に立つ社会科の授業改革』明治図書。
- 全国社会科教育学会（2001）：『社会科教育研究ハンドブック』明治図書。
- 全国社会科教育学会編（2007）：『小学校の優れた社会科授業の条件』明治図書。
- 東京学芸大学社会科教育研究室編（2006）：『小学校社会科教師の専門性育成』教育出版。
- 日本社会科教育学会編（2000）：『社会科教育事典』ぎょうせい。
- 日本社会科教育学会編（2008）：『社会科授業力の開発 小学校編』明治図書。

日本地理教育学会編（2006）：『地理教育用語技能事典』帝国書院。

日本標準教育研究所（2004）：『小学校教科書単元別到達目標と評価基準社会』（株）日本標準。

文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説社会編』文部科学省。

文部科学省（2008）：『中学校学習指導要領解説社会編』文部科学省。

文部科学省（2008）：『小学校学習指導要領解説生活編』文部科学省。

星村平和編（1997）：『社会科授業の理論と展開』現代教育社。

宮本光雄編（1996）：『生活科と社会科の接続・発展』東洋館出版社。